

平安時代におけるハツカシとハツカシゲナリの違い

白井清子

キーワード はづかし・はづかしげ・げ・接尾語・形容詞連体形

はじめに

周知のとおり、平安時代のハツカシやハツカシゲナリの用法には、現代語の「恥ずかしい」や「恥ずかしそうだ」という意味では解釈できない。「こちらが恥ずかしくなるほど相手がりっぱだ、優れている。こちらが気づまりに感じるような相手のありさまだ」のような意味を表す場合がある。その現代語とは異なる用法はハツカシ・ハツカシゲナリの用例全体のなかでどのような位置を占めているのだろうか。そのような疑問を抱いたのは、『源氏物語の鑑賞と基礎知識 9 葵』（監修鈴木一雄 編集宮崎莊平 至文堂 一〇〇〇年）で、「恥づかしげ」という言葉をとりあげた欄（秋澤互執筆 一〇三ページ）を見たからである。そこには次のような内容が記されている。

古文の「恥づかし」や「恥づかしげ」は、現代語の「恥ずかしい」とは異なり、「こちらが恥ずかしくなるほど」相手が優れている」の意味があるが、古語にも現代語の「恥ずかしい」の意味用法があり、むしろこちらの方が一般的だ。こう指摘したあと、葵の巻の、物の怪らしきものに悩む葵の上の傍らに光源氏が寄り添う場面、「例はいとわづらはしう恥づかしげなる御まみを、いとたゆげに見上げて、うちまもりきこえたまふに」の「恥づかしげ」を取り上げ、ここは

「源氏が恥ずかしくなるほど、優れている感じの葵の上の目元、という意味である。この妻を満足に愛せず、常々うる暗い思いを抱いている源氏は、葵の上の伶俐な眼差しに、何となく引け目を感じてしまうのだろう」としている。そして、さらに次のような記述が続く。

ちなみに、中田祝夫編監修『古語大辞典』（昭和58）は「恥づかしげ」の語義として

- ① 恥ずかしく思われるようなさまだ。恥ずかしいことだ。
 - ② 恥ずかしく思っている様子だ。恥ずかしそうだ。優しげだ。
 - ③ こちらが恥ずかしいと思うほどに優れたさまだ。及びがたくりつぱだ。
 - ④ 比較してまさり得ない。
- を挙げている。むろん、この場面の用法は③の事例に該当するが、このように見る限り、この「恥づかしげ」においても、現代語の語義に近い①や②のほうが一般的なようだ。

以上のように記している。ちなみに、中田祝夫編監修『古語大辞典』には①に宇津保物語、②に枕草子と平家物語、③に宇津保物語と源氏物語、④に源氏物語の例が挙げられている。

当該箇所のハツカシゲについて異論はないが、ひろく平安時代のハツカシゲナリの用法を見ると、『古語大辞典』の①や②はむしろ少数で③が主である。しかしどうして③の用法が主なのだろうか。ハツカシの場合はどうなのであろうか。それについて述べていきたい。

一、ハツカシ・ハツカシゲナリの意味別使用状況

ハツカシゲナリがハツカシから派生した形容動詞であるから両語が意味用法で共通性があるのは当然だろうが、平安時代の用法を調べてみると、実はそこには用法上顕著な違いが見られる。まず、平安時代における両語の用法について

宇津保物語・枕草子・源氏物語・栄花物語の四作品を調べた結果を示そう。使用した索引、および、引用に用いたテキストは以下のとおりである。ただし、引用にあたっては表記を変えた部分がある。なお、解釈にあたっては各種の注釈書を参考にした。

『宇津保物語 本文と索引』宇津保物語研究会 笠間書院 一九七三～七五年（注1）

『枕草子総索引』 監修松村博司 右文書院 一九六七年

『源氏物語語彙用例総索引 自立語編』上田英代ほか 勉誠社 一九九四～九六年

『栄花物語 本文と索引 自立語索引編』 高知大学人文学部国語史研究会編 武蔵野書院 一九八五年

『新編日本古典文学全集 宇津保物語』 中野幸一校注・訳 小学館 一九九二～二〇〇二年

『日本古典文学大系 枕草子 紫式部日記』池田亀鑑 岸上慎二校注 岩波書店 一九五八年

『日本古典文学全集 源氏物語』 校注・訳 阿部秋生 秋山虔 今井源衛 小学館 一九七〇～七六年

『日本古典文学大系 栄花物語』松村博司 山中裕校注 岩波書店 一九六四～六五年

ここに記したものの以外は特に断らないかぎり、岩波書店 日本古典文学大系を用いた。

ハツカシ・ハツカシゲナリの意味を、大きく次の a・b 二つに分けた。

a 気おくれする。気話まりだ。恥ずかしい。……ハツカシ

いかにも恥ずかしいことだ。恥ずかしそうだ。……ハツカシゲナリ

b (こちら側の感情を表現するのを主とする用法。現代語の「恥ずかしい」より意味領域は広いが一括して扱う) こちらが恥ずかしくなるほど相手が優れている、りっぱだ。こちらが気づまりになるような相手のありさまだ。

(相手側の状態を主に表現する用法)

それぞれの用例を一つずつ掲げておく。

ハツカシ

a この朝臣に見ゆる「見ラレルコト」こそ恥づかしけれ。(宇津保・蔵開・中)

b 「隆姫ハ」作文・和歌などの方、世にすぐれてめでたくおはします。心にくくはづかしき事限なくおはします。(栄)

表1 ()内はa、bの占める%

		宇津保物語	枕草子	源氏物語	栄花物語	計
ハツカシ	a	48(77.4)	21(87.5)	188(92.6)	46(86.8)	303(88.6)
	b	14(22.6)	3(12.5)	15(7.4)	7(13.2)	39(11.4)
	計	62	24	203	53	342
ハツカシゲナリ	a	2(40.0)	1(33.3)	8(12.3)	5(26.3)	16(17.4)
	b	3(60.0)	2(66.7)	57(87.7)	14(73.7)	76(82.6)
	計	5	3	65	19	92

表2

		宇津保物語	枕草子	源氏物語	栄花物語	計
ハツカシヤ	a				1	1(100.0)
	b					
ハツカシカラ	a	3				3(100.0)
	b					
ハツカシク	a	16	2	64	3	85(93.4)
	b	2		4		6(6.6)
ハツカシウ	a	8	2	48	28	86(92.5)
	b	2		1	4	7(7.5)
ハツカシカリ	a		1	1		2(50.0)
	b			2		2(50.0)
ハツカシ	a	14	8	29	4	55(98.2)
	b	1				1(1.8)
ハツカシキ	a	3	6	16	7	32(57.1)
	b	9	3	9	3	24(42.9)
ハツカシカル	a			2		2(100.0)
	b					
ハツカシケレ	a	4	2	27	3	36(100.0)
	b					

花・八

ハツカシゲナリ

a これ「コチラノ物乞イ」はいとはづかしげに思ひて、あはれなれば（枕草子・八七・職の御曹司におはします頃、西の廂に）

b 「中ノ君付キノ女房ノ詞」 「中納言殿」葦は、なつかしく恥づかしげなるさまぞそひたまへりける」（源氏・総角）

表1では各作品におけるハツカシ・ハツカシゲナリの a・b の意味別の数、表2はハツカシの活用形ごとの意味別の数を示す。

表1により、ハツカシでは a の用例が多いのに対し、ハツカシゲナリでは源氏物語を筆頭に b の用例が多い。ところが表2に見られるように、ハツカシではその活用形によつて意味の比率が異なる。比較的用例数の多いハツカシク・ハツカシウ・ハツカシなどと比較してみても連体形ハツカシキに b の比率が高いことがわかる。b の用例中連体形ハツカシキの占める割合は次のようになる。

宇津保物語	六四・三%
枕草子	一〇〇・〇%
源氏物語	六〇・〇%
栄花物語	四二・九%
四作品全体	六一・五%

「こちらが恥ずかしくなるほど相手がりつぱだ」などの意味がハツカシの連体形やハツカシゲナリに多いということ、は夙に原田芳起著『平安時代文学語彙の研究』（注2）で触れられている。しかし、そこには客観的データはもちろん詳しい説明もない。そこで、ここではその現象の生ずる理由も考えていきたい。

二、ハツカシキについて

ハツカシの場合、「こちらが恥ずかしくなるほど相手がりつぱだ。こちらが気づまりに感じるような相手のありさまだ」の意味は連体形ハツカシキで現れることが多いとさきに述べたが、ハツカシク・ハツカシウの場合でも次のようなものもある。

①「私ニ内大臣ニトツテハ弘徽殿女御ハ」子ながら恥づかしくおはする御さまに、みえたてまつらむこそ（源氏・常夏）
これは「恥づかしくさま」に、弘徽殿女御に対する敬語「おはす」「御」が加えられた表現と見ることができよう。次のような例もある。

② かの大納言「公任」は、いと恥づかしくものし給人なり。（采花・一〇）
これも「恥づかしく人」に近い用法である。

③ かくて、「仲忠ハ」なほこの君「アテ宮」を、人知れず限りなく思ふ。殿の内には、宮もおとども、いと恥づかしく心憎き者に思したり。（宇津保・嵯峨の院）

この文脈は「心憎き」に続けるために「恥づかしく」と連用形になっているが、意味は「恥づかしく者に」と「心憎き者に」と二つの句が並列しているのである。
つまり、連体形ハツカシキやそれに近い表現をする場合には、「こちらが恥ずかしくなるほど相手はすぐれている、こちらが気づまりに感じるほどの相手のありさまだ」という意味になりやすいのである。

終止形ハツカシヤ、連用形ハツカシク・ハツカシウで前述した用法以外のものはどうであろうか。終止形の場合、こちら側の「恥じ入る心情」を話の素材として述べた上で、そう思うのだという表現主体の判断作用が働いて表現が完結する。この場合、素材としての「恥じ入る心情」というのはカナシとかイトホシとか他の形容詞と区別される、ハツカシによって表される独自の心情をいう。終止形の場合、それに話者が、自分はそう感じるのだという判断、断定が加わる。また、連用形中止法では、ハツカシと同様に素材としての「恥じ入る心情」を示した上で判断を加え、それとあとに続いていく。例を挙げて説明しよう。

終止形の例

- ④ 「光源氏ニ求愛サレテ朝顔ノ姫君ハ思ウ」昔、我も人「光源氏」も若やかに罪ゆるされたりし世にだに、故宮などの心寄せ思したりしを「父故式部卿宮ナドガコノ方ト結婚サセテモヨイトオ思イニナツタガ」、なほあるまじく恥づかしと思ひきこえてやみにしを……（源氏・朝顔）

素材としての「恥じ入る心情」と、姫君自身がそう思うのだという判断が「恥づかし」の中で表現され、それで完結している。したがって、この形では相手の状況表現に変換されにくい。

連用形の例

- ⑤ 「中ノ君ハ」思ひもかけぬありさま「匂宮ヲ迎エタコト」のつつましく恥づかしく、何ことも世の人に似ずあやしく田舎ひたらむかし、と……つつみたまへり。（源氏・総角）

この連用形中止法「恥づかしく」は「恥づかし。そして」という用法で、この場合も主体（中の君）の判断がなされた

あとで次に続いていく。連用形には中止法以外の用法ももちろん多くあるが、連用形それ自体に今述べたような「判断」が込められている場合も多く、終止形ほど安定しているわけではないが、相手の状況表現には変換されにくい。

では連体形ハツカシキの場合はどうか。ハツカシキの場合も「恥ずかしいと思う。その」と一度主体の感情として表現し、そのうえで主体にかかわる次の体言にかかつていくのが元来の用法である。

⑥ 姫君「末摘花」は、さりともと、「長イ間光源氏ヲ」待ち過ぐしたまへる心もしるくうれしけれど、いと恥づかしき御ありさまにて対面せんもいとつましく思したり。(源氏・蓬生)

「御ありさま」とあるのは末摘花自身のありさまで、「御」があるのは語り手からの敬語、末摘花が恥ずかしいと思っそんな格好・様子で光源氏に逢うのもということである。

しかし、ハツカシキの場合は「恥じ入る心情」を表現の素材に提示し、それに主体の判断をくだしつつ、そこで視点を他者に移して表現を続ける用法が生じた。それは、次の宇津保物語にあるような用法から生じたものであろう。

⑦ 朱雀帝ノ詞 あやしく心憎きところありて、恥づかしと思ふ人「仲忠」に、空事すと思ほゆるなむいとほしき。
(宇津保・内侍のかみ・第二分冊一六三ページ)

ここにある「恥づかしと思ふ人」の「人」は他者である。しかし、その恥ずかしい感情を抱く主体(朱雀帝)から「人」などで表される他者に視点と移すことが瞬間的に起こり、それがしばしばく自然に起こる変換だと考えられるようになる。一々の「と思ふ」という言い方が消え、「恥づかしき人」という表現が生じる。言い換えれば、「恥ずかしい」と話者の心情として表現し、それを終結する前に相手側を形容することはとして進んでいく。

現に連体形ハツカシキがbの意味、すなわち、「こちらが恥ずかしくなるほど相手が優れている」などの意味を表すの

は「人」や「御ありさま」などに代表される、相手側のことをあらわす体言にかかつていく場合が多い。

この連体形ハツカシキが、恥ずかしい感情を抱く主体から「人」などで表される他者(相手)に視点を移すことが瞬間的に、そして、しばしば起こるようになるのは、相手と自分を両者の関係においてとらえようとする意識が強かったからといえるだろう。そこには平安時代の宮廷社会という社会環境が大きくかわっていたのではないだろうか。他者との関係において自分をとらえ、自分との関係において他者をとらえる。自分と、自分がかかわりを持つている他者(相手)を一連のものとしてとらえる意識が強いからこそこういう表現が生じたのではないだろうか。自分と相手とを別個の存在として明確に区別し、他者は他者としてとらえるならば、「恥づかしき人」に代表されるような視点の瞬間的な変換はなされないのではなからうか。

『日本国語大辞典 第二版』の「はずかしい」の項の語誌に、平安時代に「氣詰まりである」や「こちらが気おくれするほど、相手が優れているさま」など相手を評する例が数多くあるのは「周囲を強く意識したもの」と指摘しているのは前述のような意味でなら賛成したい。

三、ハツカシゲナリについて

ハツカシゲナリはもつと顯著にbの意味、すなわち、「こちらが恥ずかしくなるほど相手が優れている」という類の意味を表すことが多い。これについて、前記『平安時代文学語彙の研究』で原田芳起は次のように説明している。

中古の「はづかしげなり」は、結合の緊密さが「はづかしきさまなり」よりも強いが、また十分一語化せず、はづかし・げ・なり

の三つの形態素が多分に単語の独立性をもっていたと見るべきで、そのことが前述のような表現性(対者の状態を表現する働き——白井注)をもつことができたのである。(一一三〜四ページ)

この原田の説明だけではわかりにくい。そこでもう少し詳しく考える手がかりとして、bの意味で使われている源氏のハツカシキとハツカシゲナルを比べてみたい。まず、次の例を見ていただきたい。

⑧「明石ノ入道」内に入りて「光源氏カラノ文ニ返事ヤスルヨウニ」そのかせど、むすめはさらに聞かず。いと恥づかしげなる御文のさまに、さし出でむ手つきも恥づかしうつつまじう、人の御ほどわが身のほど思ふにこよなくて（源氏・明石）

光源氏からの「御文」を明石の君は目にした。その目にした「御文」は明石の君などとても及びもつかないほどすばらしく「恥づかしげなる（こちらがはずかしくなるほど立派な）」ものであった。もう一つ例を示そう。

⑨「帰山ノ途中、僧都ハ浮舟ノ所ニ立チ寄り励マシ論シタ」「このあらん命は、葉の薄きが如し」と言ひ知らせて、「松門に暁到りて月徘徊す」と、法師なれど、いとよしよししく恥づかしげなるさまにてのたまふことどもを、思ふやうにも言ひ聞かせたまふかな、と「浮舟」聞きぬたり。（源氏・手習）

ここでも「恥づかしげなるさま」とは今浮舟が実際に目にしている漢詩を朗詠する僧都のようすである。

このように、ハツカシゲナルは具体的に目にしたもののようすや、実際に接した人のありさま、しぐさについて「こちらが恥ずかしくなるほど……だ」と表す。ところが、ハツカシキは少し違ふ。

⑩「前齋宮ヲ藤壺中宮ガ取仕切り冷泉帝ニ入内サセル」宮「藤壺も、「かく恥づかしき人参りたまふを、御心づかひして、見えたてまつらせたまへ」と聞こえたまひけり。（源氏・繪合）

これは藤壺や冷泉帝が前齋宮に実際に接して「恥づかしき人」といつているのではなく、さまざまな情報から全体像として「こちらが恥ずかしくなるような優れた人だ」と表現しているのである。次の場合もそうである。

⑩「光源氏ノ秋好中宮評」親しきほどに馴れきこえ通へど、恥づかしきところの深うおはする宮なれば（源氏・梅枝）

ここでも、漠然とした人物の全体像にハツカシキを使っている。つまり、ハツカシキは具体的に今目になっているものとは限らない、相手の全体的ようす、印象、評価を表す言葉として使われることがあるのに対し、ハツカシゲナルは今現に目にしているか、日ごろ接してよく知っているその人のふるまいやありさまなど、具体的な物事、状態に対して使用している。しかし、考えてみればこれは当然である。なぜならハツカシゲナルにはゲが含まれているからである。ゲは次のようなケをもととする。

⑪「紫ノ上ハ」わざとつらしとはあらねど、かやうに「光源氏ト女三ノ宮ノコトデ」思ひ乱れたまふけにや、かの「光源氏ノ」夢に見えたまひければ（源氏・若菜上）

このようにケは「自然や人間の活動が目に見えるかたち、感じ取れるかたちとして現れた力や勢い」を表すことばである。したがって、このケを含むハツカシゲナルが具体的な物の状態や人のふるまいなどに接して表現されるのは当然なのである。では、なぜ、対象の状態をあらわすのか。それはこういうことではないだろうか。

ハツカシゲナリのハツカシはいわゆる形容詞の語幹である。語幹は前述の用語でいえば、素材としての「恥じ入る心情」を一般的な概念としてのみ表し（ハツカシ）、そう感じるのだという主体の判断を加えない。そういう「恥じ入る心情」を引き起こす具体的な形やじぐさ（ゲ）を有する状態である（ナリ）と表現したのがハツカシゲナリではないだろうか。つまり、一般的にそれに対してしている人が恥ずかしいと感じるようなものが目に見えるかたちに現れている相手のありさまだという意味である。このハツカシとゲの結び付きにbの用法のハツカシキが影響したことはもちろんである。

ハツカシヤハツカシゲナリ、bの「こちらが恥ずかしくなるような相手のありさまだ」に類する用法が、自分と相手とを両者の関係でとらえようという意識の強い場で生じたと考えると、この用法が特に源氏物語に多いのも理解できる。同時に、それはそういう場が崩れると失われやすい用法だということでもある。

四、院政期以降のハツカシとハツカシゲナリ

栄花物語以降の作品でもbの対者の状態を表現するハツカシ、ハツカシゲナリが無いではないが、中世以降になるとごくわずかになる。特にハツカシゲナリは見つけるのが難しい。両語の目に付いた例を若干挙げ、この稿を終わりにする。

⑬ 大臣詠ヒ遊ビ給テモ、常ニ此ノ簾ノ方ヲ尻目ニ見遣リ給フ眼目マミナド、耻カシ氣ナル事云ハム方无シ。(今昔・二二・八)

⑭ 「清盛ノ謀反ノ心ヲヤワラゲタ重盛ノコトヲ」君も此よしきこしめして、「今にはじめぬ事なれ共、内府が心のうちこそはづかしけれ。怨をば恩をもつて報ぜられたり」(立家・二・烽火之沙汰)

⑮ 片田舎よりさし出たる人こそ萬の道に心得たるよしのさしいらへはすれ。されば、世に恥づかしきかたもあれど自慢スルヨウナ態度ヲ取ルダケアツテ感心サセラレルヨウナ面モアルケレド」(徒然草・七九)

⑯ 「以德報怨」トハ是ヲ申ベキ。ハツカシノ本間ガ心中ヤ。(太平記・一〇・本間自害事)

【注】 1 本文に疑問のある二例(六一四五、一一八七〇)は除いた

2 原田芳起『平安時代文学語彙の研究』 風間書房 一九六二年